慶應義塾 医学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160―8582
東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
●外来診療時間＝午前8時40分～午後12時 午後1時～午後4時（特殊外来）
●電話＝03（3353）1211（大代表）

速報

第108回医師国家試験

新卒103名中101名が合格 問題難化も好成績残す

平成26年2月8日から10日にかけて実施された第108回医師国家試験の合格発表が、3月18日に厚生労働省より行われた。

第108回医師国家試験の受験者総数は8632名、合格者は7820名で全体の合格率は90・6%であった。昨年の89・8%より増加し、合格率が2年ぶりに9割以上に回復した。男女別合格数は男5337名、女2483名と、合格者のうち31・8%を女性が占めた。合格基準は一般問題130点以上（199点満点）、臨床問題397点以上（600点満点）、必修問題160点以上（200点満点）、禁忌肢問題選択数3問以下であり、一般問題と臨床問題のボーダーが約5%ずつ下がる結果となった。

ここ最近の傾向として、問題文中に「現時点の」という語句が入るものが多いということが挙げられる。研修医としての最初の行動を意識した設問なのだろう。他にも臨床実習を重視する問題や、診断を確実につけさせる問題が増加している。医学部教育の中で単なる暗記による知識だけではなく、医師として働くための考え方を身につけているかを問う傾向にあると言えよう。

さらに今年度は一般問題の各論が難化しており、受験生は解答に難儀したようである。

本塾医学部では総計109名が受験し102名が合格（93・6%）、うち新卒は103名が受験し、101名が合格（98・1%）した。今年も昨年に続き残念ながら新卒合格率100%は達成することが出来なかった。

しかしながら、この結果は93回生国家試験対策委員によるきめ細やかな対策があってこそのものだ。早くから前年の国家試験の傾向を踏まえた説明会を行い、積極的な模試受験の推奨など計画的な学習を促した。時には委員が直接他の学生とともに勉強し、進捗度を量る姿も見られた。またこのような委員達の活動により、学年全体のモチベーションも上がり合格を目指す雰囲気が強くなったのであろう。

重圧をはねのけ難関を通過した今年の93回生には敬意を表したい。4月より医師になる102名には、本学の名に相応しい活躍を期待したい。

（5年　岡田真彦）

第108回医師国家試験　新卒合格率順位

順位	大学名	合格率（%）	合格者数/受験者数
1	福島県立医科大学	100	90/90
1	順天堂大学	100	90/90
1	山梨大学	100	85/85
1	佐賀大学	100	85/85
1	防衛医科大学校	100	63/63
6	自治医科大学	99.1	106/107
7	札幌医科大学	99.0	102/103
7	浜松医科大学	99.0	99/100
7	広島大学	99.0	99/100
10	筑波大学	98.9	92/93
10	琉球大学	98.9	87/88
〃	〃	〃	〃
15	慶應義塾大学	98.1	101/103

塾歌斉唱

平成25年度卒業式

医学部103名、次のステージへ！

平成25年度卒業式が3月24日、日吉記念館で行われた。卒業生や彼らを祝福する家族で賑わう中、式典は午前10時定刻に開始された。

開式の辞より始まった式典では、まず長谷山彰常任理事による学事報告がなされ、各学部の卒業生数および表彰者数が読み上げられた。卒業生数は全学部で6427名、うち医学部は103名であった。次に各学部の代表者への学位記授与が行われ、医学部からは高岡早紀君が受領代表となった。続いての各種表彰では、まず大学表彰規程による表彰、すなわち医学部首席として田中千尋君が表彰を受けた。次に小泉体育努力賞として、医学部から柔道部1名、弓道部1名、端艇部25名、水泳部1名、競走部5名、バスケットボール部17名、空手部1名、ゴルフ部8名が表彰された。最後に小泉体育奨励賞や塾長賞の表彰が行われた。

各種表彰の終了後、清家篤塾長が式辞を述べた。塾長は、激動の時代を生きた福澤先生が、異文化にも柔軟に対応できる人材を育成しようと義塾を設立したことに絡め、「これからは世界の相互依存が深化する国際化がますます加速する。そのような中で卒業生には、義塾で学んだ実学の精神を基に自らの人生を切り開き、社会に積極的に参加してほしい」とエールを送った。

次いで、日本たばこ産業株式会社監査役の今井義典氏から塾員代表として祝辞があった。今井氏は、自らの人生で得た3つの教訓、すなわち、「恩師の言葉を忘れるべからず」、「変化に受け身にならず自らが変革のリーダーであれ」、「人生に無駄なことは何一つなし」という言葉を卒業生に贈った。これに続き、医学部の秋葉庸平君が在学生代表で送辞を述べた後、卒業生代表として文学部の三浦優歩君が登壇し社会に出る上での決意を語った。

式の結びには、会場にいる塾職員と卒業生など、慶應社中による塾歌斉唱が行われた。同会場では引き続いて2014年三田会結成式が行われ、無事閉式となった。

（5年　森田篤帆）

謝恩会開催

本年度の謝恩会が3月24日、帝国ホテル富士の間において執り行われた。今年度の卒業生である93回生が参列し、会は終始和やかな雰囲気で進行した。

謝恩会は19時に開会し、来賓の挨拶、卒業生紹介、卒業記念品授与、寄贈品贈呈、謝恩会委員挨拶、若き血斉唱と続いた。

清家篤塾長は挨拶にて、2000年にノーベル経済学賞を受賞したJames Heckman氏が唱えた非認知的能力、即ち真面目さや協調性というものが本塾卒業生の強みであるとし、認知的能力である知識や技能と共に高めていくことが重要だと述べた。

戸山芳昭常任理事は慶應病院の展望を中心に語り、初期研修で一回りも二回りも大きくなって戻ってくるようにと期待を寄せた。

末松誠医学部長は、世界的な少子高齢化に直面している現状に触れつつ、「これまでに得た膨大な知識を臨床現場で活きる知恵に変え、患者への奉仕の心を忘れずにそれぞれがこの時代にできることを遂行してほしい」と語った。

比企能樹三四会会長は、「こんなに多くの方々が三四会に加わってくれて嬉しい」と新しく三四会の正会員となる93回生に対し歓迎の言葉を述べた。

岡野栄之医学研究科委員長は挨拶の中で、「今日の日の感激を一生忘れないでほしい」と語るとともに、医師の在り方を自らの専門である幹細胞に喩え、様々な場所で武者修行を積むこと、そして次の世代を担う医師を育てることの大切さを説いた。

竹内勤病院長は、「熱意を忘れない」、「困難な時代にも一歩踏み出す勇気を持つ」、「常に患者に尽くす謙虚な気持ちでいる」という三点を備えた理想の医師像を語って来賓挨拶を締めくくるとともに、自ら乾杯の音頭をとった。

93回生が卒業後も更なる飛躍を遂げ社会の先導者となることを願うとともに、我々在校生も義塾で学ぶ者としての自覚をより一層強く持ち、世界の医学の進歩に寄与できるように研鑽を積む必要があると強く感じた。

（5年　森田篤帆）

晴れ姿の93回生たち

祝賀会

御子柴克彦博士 レジオン・ドヌール勲章受章

左から、理化学研究所脳科学総合研究センター・副センター長の宮脇敦史博士（66回生）、御子柴先生ご夫妻、筆者

平成26年2月3日、師匠の御子柴克彦先生のレジオン・ドヌール勲章の受章祝賀会が丸の内の銀行倶楽部で執り行われました。小生は、門下生を代表し、司会の大任を仰せつかりました。御子柴先生のこれまでの文化・科学における功績、および日仏間をふくめた国際的な文化・科学の交流における御貢献が認められ、このたびフランス共和国政府よりフランスでは最高位の勲章であるレジオンドヌール勲章シュヴァリエに叙されました。

同勲章は、日本人では、黒澤明、大江健三郎、平山郁夫、小澤征爾、政治家では伊藤博文、中曽根康弘、科学者では数学者の広中平祐先生、物理学者の有馬朗人先生など蒼々たる方々が受章されておられます。

御子柴先生は1969年に慶應義塾大学医学部を卒業、同年医学部生理学教室に入室し、1973年医学博士号を取得しました。同大学で専任講師を2年間務めた後に渡仏。パスツール研究所で1976年から77年まで、ジャン＝ピエール・シャンジュー教授の下、運動失調を起こす動物に欠損しているP400というタンパク質の性質を研究しました。帰国後もP400の研究を続け、このタンパク質が身体にとって重要な役割を果たすIP3受容体であることを発見しました。IP3受容体が細胞内でカルシウムイオンを放出することを突き止め、身体の働きを調節するために極めて重要な分子であること、この分子の異常がさまざまな病気を引き起こすこと、さらにヒトの遺伝子異常なども発見されました。

1982年には、慶應義塾大学助教授に就任。1985年に大阪大学蛋白質研究所教授、1992年に理化学研究所主任研究員、東京大学医科学研究所教授に就任しました。理化学研究所での卓越した研究業績によって、神経科学と分子生物学の分野における日本の第一人者となったほか、世界の科学界でも認められ、慶應医学賞やメダイユ・デュ・コレージュ・ド・フランス、紫綬褒章、日本学士院賞など、多数の受賞歴があります。現在も理化学研究所脳科学総合研究センターで精力的に研究に取り組んでいます。

祝賀会では、伊藤正男先生、在日フランス大使館フランス大使のクリスチャン・マセ様、TBSニュース23アンカーの岸井成格さま、ピアニストの中村紘子さま、豊島久真男先生、高久史麿先生、日本学術振興会理事長（前慶應義塾長）の安西祐一郎先生、清家篤・塾長といったdistinguished guestsの御祝辞があり、司会者としてはいささか緊張しましたが、会も無事終了！御子柴一門の同窓の諸君とも久しぶりに会えて楽しい会でありました！

（岡野栄之　生62回）

平成25年度

慶應義塾大学医学部 准教授講師会 総会および懇親会を終えて

准教授講師会　会長　末岡　浩（59回）

平成26年2月14日（金）に大雪の悪天候にも関わらず、18時より第一会議室にて総会が開催された。現在、准教授講師会（准講会）は、会員数140名からなり、会長と幹事　粟津緑（小児科学）、谷川瑛子（皮膚科学）、吉村公雄（医療政策・管理学）、今西宣晶（解剖学）、村松太郎（精神・神経科学）、須田康文（整形外科学）の7名が幹事役を務めている。審議事項のなかで今回は大きな審議案件を議論した。それは、会員からの毎月の会費を貯蓄した資金の中から、これまで、公益性の高い活動団体に寄附をしてきたが、本年は、いよいよ建設が佳境に入った新棟建設のための募金への寄付について議論された。旧新棟（現在の二号棟）の建設の際にも准講会からは寄附を行ったが、今回、平成21年度～25年度の計五年間分貯蓄してきた、一千万円を一括して寄附することが満場一致で決定された。

その後、雪に足を取られながらも場所を移動して、18時半から総合医化学研究棟1階ラウンジにて、末松誠医学部長先生と竹内勤病院長先生をお招きして懇親会が開催された。先生方には、貴重なお話を会員にしていただいた。

今年のミニレクチャーは、河奈裕正先生（歯科・口腔外科学）に「消化器の入り口を担当して　～歯科・口腔外科における最近の進歩と将来～」と題してご講演いただいた。小児時に喘息のため時期を迎えてから耳をカットし、そこから歯の治療を行い、耳を新たに形成する手術など、特にインプラントによる治療については、解りやすく動画を交えて説明をしていただいた。また、脳に近い、極めて扱いが重要なドリルを遠隔操作することも開発中であることも教えていただいた。そして、プロ野球選手が監督に怒られて、思わずタオルを噛みしめ、歯が折れてしまった写真など笑いも誘う講演内容であった。

シリーズ講演は、門川俊明先生（医学教育統轄センター）による「医学部教員のためのデジタルLife Hack」と題して、一同が毎月の仕事のためになるご講演をいただいた。その一部をご紹介すると、文献検索にGoogle Scholarを利用することにより、誰が自分の論文を引用したか、その回数が分かること、〝逆引き〟で、現在自分の論文を参考文献として引用している人が分かること、学会にはファイルを持参せずともドロップボックスに保存をしておけば、他人のパソコンからでもファイルを取り出すことが可能であるなど画期的な話しが満載であった。

その後は、乾杯と食事をしながら、新入会員20名の紹介が行われた。昨年度からスライドを使った自己紹介もあり、記憶に残るものであった。左記に新入会員をご紹介させていただきます（順不同・敬称略）。

阿部貴行（衛生学公衆衛生学）、久保健一郎（解剖学）、森毅彦（内科学（血液））、久保田義顕（電子顕微鏡研究室）、鈴木昌（救急医学）、石井智弘（小児科学）、新庄正宜（小児科学）、飯野守男（法医学）、吉田理（医学部血液浄化・透析センター）、赤松和土（生理学）、松田信爾（生理学）、田坂定智（内科学（呼吸器））、栗原勲（内科学（腎臓・内分泌・代謝））、松原由美子（坂口光洋記念講座（発生・分化生物学））、篠田昌宏（外科学（一般・消化器））、橋口明典（病理学）、三上修治（医学部病理診断部）、内田浩（産婦人科学（産科））、冨永英一郎（産婦人科学（婦人科））、蓮輪英毅（分子生物学）

知らぬ間に雪が深く積もるなか、時間を忘れて、談笑しながら東京會舘の温かい料理でお腹も満たされた一時でした。

ミニレクチャー講師の河奈裕正先生（歯科・口腔外科学）

シリーズ講演　門川俊明先生（医学教育統轄センター）

国際シンポジウム開催

ノーベル化学賞受賞のアグレ教授も参加

3月18日、ピーター・アグレ教授（ノーベル化学賞、2003年）を迎え、「信濃町国際シンポジウム」が開催された。アグレ教授は現在、米国ジョンズホプキンス大学マラリア研究所所長として、マラリアの基礎研究およびアフリカにおけるフィールドワークを中心に活動されている。

シンポジウムは、「グローバル医学、医療を考える」というテーマで、2部構成（第1部：アグレ教授の基調講演とパネルディスカッション、第2部：信濃町国際学生団体と留学生による各国の紹介）で行なわれたが、信濃町国際学生団体と留学生を中心に多くの学生が参加し、大変盛況な会となった。

アグレ教授の基調講演は、「Opening Doors Worldwide Through Medical Science」という大変魅力的な演題のもと、ノーベル賞受賞の対象となったアクアポリンの発見の話から始まった。単に研究の詳細を説明するのではなく、それらの研究が信頼関係に基づいた国際的共同研究体制のもとに成し遂げられていた事をそれぞれの研究者を紹介しながらお話しされていたのが印象的だった。続いて、最近のアフリカでのマラリア研究フィールドワークやキューバ、北朝鮮を訪れて若い学生達と交流した貴重な経験もお話しいただいた。

パネルディスカッションは、安井正人（国際交流委員会委員長）が司会となり、アグレ教授および4名のパネリスト：百武美沙（医学部6年）、北澤晶子（医学部4年）、イブラハム・オサマ（医学研究科博士課程修了、眼科助教）、ミタル・ニシャント（医学研究科博士課程1年）を迎えて行なわれた。それぞれのユニークな国際的な活動や人的交流の話が紹介された後、「医学、医療における倫理の重要性」というテーマで意見交換がなされた。今後はグローバルな視点とローカルな視点の両方が重要であり、そのためにもオープンマインドなコミュニケーションの必要性が再認識された。

第2部はレセプションという形式で、カジュアルな雰囲気の中、留学生による各国の紹介や医学部学生による海外活動報告が行なわれた。各国の紹介では、今まで知らなかったようなそれぞれの国の特徴や背景がある事もわかり、改めて世界の広さと奥深さを知ると同時にコミュニケーションの大切さが確認できた。

一方、医学部学生の海外活動では、伝統のある夏期米国病院研修、国際医学研究会（IMA）、日中・日韓医学生交流協会に加え、最近始まった他学部合同ラオス国際保健研修、アフリカコンゴ民主共和国に於ける小学校健診プロジェクト、そして他大学合同医療倫理サマースクール（オックスフォード）などの紹介があり、改めて慶應医学生の国際交流に対する関心の高さが伺えた。

こうした双方向からの国際交流を継続していくことで、次世代に活躍する若い学生達が国際間における人的交流を深め、グローバルな感性を磨き、グローバル医学、医療の発展に大いに貢献していってもらいたいと思う。

（医学部国際交流委員会委員長　安井正人　薬理68回）

ピーター・アグレ教授による基調講演

レセプションでの集合写真

鑑定知来

昨年来、政府においていわゆる「日本版NIH」の創設が検討されている。具体的には、成長戦略として閣議決定された「日本再興戦略」の中で、「革新的な医療技術の実用化を加速するため、医療分野の研究開発の司令塔機能（「日本版NIH」）を創設する」とされ、今国会に実現のための法案が提出されている。健康・医療の分野が政府全体の方針の中で成長の潜在力を有すると認められていることは率直に嬉しく、「革新的な医療技術の実用化」を研究開発の最終目標とすることも、考えてみれば当然のことである。

しかしながら、日本の現状について、同戦略では、「高い技術力を有しており、国や大学の研究機関も民間も世界の先端を行く研究を行い、将来有望な技術シーズを数多く保有している（中略）にもかかわらず、最終製品段階の国際競争で他国の後じんを拝することが多い」と分析している。その要因について、その後とりまとめられた「医療分野の研究開発に関する総合戦略」では、「研究者の社会還元の志向性が強くなかったことに加え、（中略）組織的なマネジメントがなされていなかった」、「治験や臨床研究における倫理規定、データマネージメント、安全性、品質保証などに関する国際基準がより厳格化されるなかで、我が国の対応が遅れた」と指摘している。

自分が教育を受けた当時を振り返っても、研究、論文発表及びそれらの指導は活発に行われていても、その後の実用化については、組織的に取り組まれないことが多かったように思う。

とはいえ、それも今は昔の話。塾医学部には既にクリニカルリサーチセンターが設けられ、厚労・文科両省からも早期・探索的臨床試験拠点及び再生医療実現拠点の指定を受け、実用化のための体制整備を進めている。今後、塾医学部が我が国の革新的な医療技術の実用化を牽引していくものと期待している。

（厚生労働省　木内哲平　82回）